



日中友好の未来を担う若者を育てたい

—— 北京外国語大学への日本人留学生派遣事業にかける思い ——



NPO 法人国際交流教育後援会 木村太郎理事長

——まず、この事業について教えてください。

木村太郎（以下、木村） 日本には、長年にわたり日中友好のために活動をしている熱心な民間組織があります。

この組織は、日中関係が良好な時期も困難な時期も、「日本の若者を中国へ送り、中国語と中国文化を学んでもらい、将来の日中友好を支える人材を育てる」という理念を一貫して守り続けてきました。

私たちは、「日中友好の未来は、人と人との交流、とりわけ若い世代の相互理解によって築かれる」と信じています。そのため、どのような状況でも人材育成だけは止めてはならないという思いで活動を行っています。

——どのような方々が支えているのですか。

木村 大学教員や企業経営者、大手企業の管理職など、さまざまな分野の人々がこの活動を支えています。

共通する思いは、「真の日中友好は相互理解から生まれる」ということです。政治や外交には波がありますが、そのたびに交流を止めてしまえば、未来の日中友好を支える人材は育ちません。だからこそ、私たちは日本の若者を中国へ送り続けています。私も、その活動に携わる一人です。

——中国に関心を持ったきっかけは何ですか。

木村 高校時代、漢文の授業を通じて中国の歴史や文化に魅了され、中国への強い関心を抱くようになりました。

当時は中国に関する情報も限られていましたが、その未知の世界に惹かれ、中国語を学ぶため大学へ進学しました。中国語を学ぶ中で、中国文化の奥深さと隣国を理解することの大切さを実感しました。

——その後はどのような仕事をされたのですか。

木村 大学卒業後は日本航空株式会社に入社し、主に国際航空貨物事業に携わりました。

ギリシャ、アメリカ、中国・上海への駐在を経験し、中国では多くの方々と協力しながら仕事を進めました。その経験を通じて、国や文化が違ってても相互理解と信頼があれば良い関係を築くことができると実感しました。

——現在の留学派遣事業には、どのように関わるようになったのですか。

木村 その後、ご縁があり、中国語学者・香坂順一先生が創設された北京外国語大学への留学生派遣事業に参加し、2021年7月から代表を務めています。

この事業は、中国語を学ぶだけではなく、中国社会や文化、人々を理解し、将来の日中交流を担う人材を育成することを目的としています。

——この事業で最も大切にしていることは何ですか。

木村 一人でも多くの日本の若者に中国で学び、中国語だけでなく、中国社会や文化、人々に直接触れてもらうことです。

現在も日本には中国語を学びたい、中国をもっと理解したいと考える若者がいます。私たちは、そのような若者に学ぶ機会を提供し、中国語を話せる日本人、中国を理解する日本人を一人でも多く育てることが、未来の日中友好につながると信じています。

——コロナ禍では、どのような困難がありましたか。

木村 私が代表に就任した時期は、新型コロナウイルス感染症の影響が最も深刻な時期でした。

留学生は全員日本へ帰国し、授業はオンラインとなりました。特に新入生や保護者の不安は大きく、私たちは北京外国語大学と連携しながら支援を続けました。

「必ず学生たちを再び中国へ送り出す」という思いだけは変わりませんでした。

——留学再開の時は、どのようなお気持ちでしたか。

木村 2022年、北京外国語大学をはじめ多くの関係者のご協力により、学生たちは再び中国へ渡航することができました。

キャンパスで学び、中国の学生や先生方と交流する姿を見ることができたことは、この事業に携わる者として何よりの喜びでした。

——日中関係について、どのように考えていますか。

木村 日中関係はさまざまな変化を経験してきましたが、民間交流の重要性は変わりません。

政治や外交に左右されることなく、中国語を学び、中国を理解する日本人を育て続けることが、未来の日中友好の礎になると信じています。若い世代の交流を絶やさないことこそ、私たちの最も重要な役割だと考えています。

——今後の抱負をお聞かせください。

木村 これからも北京外国語大学との協力を大切にしながら、日本の若者を中国へ送り続けたいと思います。

日中関係がどのような時代を迎えようとも、人材育成への歩みを止めることはありません。一人でも多くの日本の若者が中国を理解し、中国の若者との友情を育み、未来の日中友好の架け橋となるよう、これからも努力を続けてまいります。

木村 太郎 (きむら たろう)

1974年東京外国語大学中国語学科卒業後、日本航空(株)入社、貨物担当役員付マネージャー等を務める。主に貨物事業部門にて勤務する中、ギリシャ、米国、中国(上海)での海外駐在を経験。同社退社後、2021年よりNPO法人国際交流教育後援会理事長を務める。

北京外国語大学本科(4年制)及び短期(半年～2年間)への入学にご関心のある方は、同学事務局にご連絡ください。





中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

もうご飯食べた？

大学教員 細井 駿吾



旧正月の飾り付けがされているショッピングモールにて

世界では、毎日様々なことが起こっており、そして科学の発展も凄まじいスピードで進んでおります。今そして、私たちはそんな日々の中で毎日を過ごしており、同じ国の人だけでなく、海外の人とも交流している人が多いと思います。

私も、中国の友達をはじめ、色々な国々の人と日々交流をしています。

AIの時代と言われる現在、私たちにできることはなんなののでしょうか。確かに、AIと聞くと、「難しそう。アナログ人間の私には関係ないや」と思っている人がいるかもしれません。しかし、そのAIを簡単に使うこともできると考えています。

日本と中国は遥か昔からお互いに交流を続け、今ではネットの普及に伴い、中国の友達と WeChat などを使い、とても簡単に連絡が取れるようになりました。学校や職場などで中国の友達を作った人も多いと思います。しかし、友達になったあと「どうすればいいのかな?」「連

絡交換したけど、連絡全然してない。」ということを知ったことがあります。それは、私は連絡が簡単に取れるが故に、「いつでも連絡できるから、今じゃなくてもいいかな。また今度でもいいかな」と思いメッセージを送るのを後回しにしている人や「今は仕事かもしれない、迷惑かけるかもしれない」と考えすぎてしまい、送るのをためらってしまっている人がいるかもしれません。

しかしながら、何も送らなければ、つまり行動を起こさなければ、何も始まらないのではないのでしょうか。

これは良くも悪くも日本人の相手を考えすぎてしまう性格が、邪魔をしてしまっているのかもしれません。また返事がないと心配になってしまう人もいるそうですが、メッセージだからこそ、気軽に送っていいと思います。

私は、中国を含め海外にいる友人とはメッセージでやりとりをしています。何か連絡や報告したいことがあるときはもちろん、特に用事がないときでも、何となくメッセージを送ります。もしかすると「え? 用事がないのに送るってどういうこと? 相手がもし忙しかったら迷惑じゃないの?」と思う人がいるかもしれません。もちろん、その考えもあると思います。しかし、対面でのコミュニケーションのことを考えてみてください。

友達に会ったときに、「おはよう」と挨拶をして、そこから会話が始まる場合もあると思います。そして、相手が忙しい場合や自分が忙しい場合は、挨拶をして、「じゃあまた今度ゆっくり話そう、今はちょっと急いでいるからまたあとで!」など次回に繋げることができると思います。挨拶をされて嫌な気持ちになりますか? そんな人は、あまりいないと思いますし、私ならとても嬉しいです。

メッセージの場合、「おはよう!」「何してる?」、中国の友達なら、「ご飯食べた?」など送って、もし相手からの返信がなければ、忙しいから、今はメッセージが

できないだろうと推測することができます。そして返信があれば、メッセージができるということです、そこから会話を始めればよいと思います。

そしてメッセージだけでなく、写真を送ったり、電話をしたり、ビデオ通話をしたりと色々なことができます。そして「また電話しよう！ 今度会ったら食事しよう！」など、どんどん交流が深まると思います。

また中には、やっぱり言語面での壁があるから、ちょっと難しい、緊張してしまうと思う人がいるかもしれません。そんなときにAIの出番です。例えば、中国の友達は、ボイスメッセージを使うことが多いです。そして速くて分からないこともあります。ですが、音声認識ソフトを使用することで、文字認識ができます。漢字が分かれば、意味が分かってくるのではないのでしょうか。分からなくても、それについて質問すればよいのです。また最近では、瞬時に翻訳してくれるソフトも出てきています。そうすれば、言葉の壁もなくなるのではないのでしょうか。もしかすると、翻訳に間違いがあるかもしれませんが、それは同じ母語話者同士でもあることなので気にしないで良いと思いますし、そこから笑い話になったり、新たな会話が始まるかもしれません。

つまり、実は対面の交流と変わらないどころか、AIをうまく使うことで対面以上に交流がスムーズにそして楽しくできると思います。

以前は、技術的にも、費用的にも難しかった交流が今は気軽にできるので、これを使わないのはもったいないなど感じます。そして中国の友達も、皆さんからのメッセージを待っていると思います。そして、そこから多くの交流をはじめてみるのはどうでしょうか。

皆さんもはじめての一步ならぬ、はじめてのメッセージを送ってみませんか。きっと中国人との楽しい交流、そして幸せな未来が待っているといえます。

私もこれからも中国の友達と交流を続けていきたいと思っています。

じゃあ、私も今から中国の友達にメッセージしようかな。

「もうご飯食べた？」

細井 駿吾 (ほそい しゅんご)

愛知県出身。中山大学、広東外語外貿大学での勤務経験を経て、現在は、東京都内に在住。中国語の学習をする一方、SNSを通して中国の学生や友人との交流を続けている。

「私の中国物語」その②

中国で挑戦してみた

高校生 青木 花音

私は中国でずっと育ってきたので、周りからは中国語がペラペラだと勘違いされますが本当は自分が言いたいことや思っていることを簡単に言葉に出来なくてコミュニケーションがまだ完璧ではありませんでした。それまではインター校にいましたが、高校生になって、中国で生活をしているのに何もできない自分に対する恥ずかしさと悔しさから、現地の方と交流するいい機会だと思い今の現地校に転校しました。ですが転校して現地の生徒と交流したいと思っても、どうやって交流すればいいかわかりませんでした。そんな中、私はある現地の生徒と出会いその目標を達成する未来が見えてくるようになりました。

私はチームが一つになって、みんなが役割を持って一

緒に戦うことが楽しいから中学の時からバレーボールが好きでした。だから、私は高校では現地の生徒との交流をして自分の目標を達成したかったので、新しい環境に行くのが怖かったのですが勇気を出してバレーボール部に入って挑戦することにしました。その部活では現地の生徒しかいなくてコーチも中国語で指導をしています。しかし、思っていたより現地の方の話もコーチの指導も難しくて自分の中国語のレベルがまだ全然追いついていないことを自覚し、言語での壁を感じました。他の部活の子たちも日本人の私に声をかけにくそう、うまくコミュニケーションが取れず部活を休むことが多くなってしまいました。

しかし、ある部活の練習の時、ある一人の生徒、張と

言う子が、「来たのね！ これからもよろしく」とニコニコの笑顔で私が日本人だと関係なく気軽に声をかけられました。張さんは皆人と仲が良くていつも輪の中に入れてくれたり、すごくすごく心が広い子だと私は見ていて思いました。私は張さんに対してバレーボールでも性格でもすごく尊敬をしています。そして彼女が言った「これからもよろしく」という言葉は自分にとってとても大きくて、期待されているのを感じて次も部活に来て頑張ろうと思いました。ある時こんなことがありました。部活でコーチが指導をしている時、私はどれだけ会話は聞き取れても中国語でのバレーボールの用語などは全然わからなかったの、それが一番の困難でした。でもそんな時、張さんは私が英語が得意なことを覚えてくれたからか、練習の時も私が聞き取れていないことを聞かずともすぐにコーチが言ったことを細かいことまで頑張っってわかりやすく英語に翻訳して教えてくれました。他にも一度他校へ試合しに行った時、張さんはそこで他校の子たちとも初めて会ったのにすぐに仲良く会話ができていて、それを見て私が日本人だから部活で声をかけてくれたわけではなく、彼女の性格がそもそもフレンドリーで他の子ともすぐに仲良くできるんだと気づきました。それに驚いた私はまた同じくらい尊敬をしました。そしてこのまま張さんに話しかけてもらうのではなくて、自分も何か始めないといけないと思いました。

そこから私はもっと部活へ行きたいと思いましたが、まずチームメイトと馴染むことから始めないといけないと思いました。中国語ができないからチームメイトたちが関わりにくそうにしていると、私が一人で思い込んでいたのかもしれない。張さんみたいに自分から話してみたら意外と会話できるかもしれないと思い、勇気を出し

て自分から声をかけました。まずはウォームアップの時など、毎回張さんとするのではなく違う人にも声をかけることから始めました。その後もみんなの話に入ってみたりして、チームメイトとも馴染めるようになり、休むこともなくなって毎回部活の練習の時にはチャイムが鳴るとすぐに飛び出してウキウキしながら練習に行きました。チームメイトも、たとえば「来週の試合くるの？」と声をかけてくれるようになって、私に期待してくれるように話してくれて自分から行動してよかったと思いました。チームメイトたちも話してみたら優しく返してくれたり、以前自分が思っていたような彼女たちの怖いイメージとは全く違いました。現地の学校だからこそ違う国の人の偏見やイメージで終わらないで交流をし、知らなかったことを学びました。私がした挑戦について後悔することはありません。今後バレーボールでもっと活躍していくことを通して、人との環境の違いでやりたいことを諦めないで、今後もっともっと自主的に行動したいと思いました。言語での壁にぶつかってしまったら、怖がらずに人に助けを求めたりして学びたいです。そして色んなところの人たちとバレーボールをして、さらに交流を今後増やして、私も張さんみたいな他の人とコミュニケーションが完璧に取れてバレーボールのプレーでも活躍する存在になりたいです。

青木 花音（あおき かのん）

2008年東京生まれ。2歳の頃に中国上海へ。上海シンガポールインターナショナルスクール中学を卒業。中学までは、バレーボール部、サッカー部、水泳部で季節毎に活動し大会に出場。現在、上海外国語大学附属高校国際部に在籍し、バレーボール部に所属。2024年には生徒会選挙に立候補し当選。中国で育った日本人として、広い世界を知り、日中のみならず世界の架け橋になれるよう、言語はもとより、様々な分野に興味がある。



初めて出た試合後の集合写真

「私の中国物語」その③

赤ちゃん、中国で生まれる

ユーチューバー モワヌ前田未希



出産費用に含まれていた自宅でのベビーフォト

「キレイな女の子ですよ～」通訳さんが、私の手を握りながら、教えてくれた。ついに、中国で三人目のこどもが生まれた。これまでの苦労からの安堵で、胸がいっぱいになり、涙が溢れた。

当初、中国渡航の予定時に、私は妊娠していなかった。しかし、コロナで、突然、家族ビザが降りなくなり、私はこども二人と東京に残ることになった。そこで妊娠が発覚した。ワンオペ妊婦の仮住まい生活は、体力的にも精神的にも、激しく辛いものだった。お腹はどんどん大きくなるものの、ビザは一向に降りず、日に日に不安と焦りがつのっていった。妊娠末期は、飛行機に乗ることができない。諦めかけた時、奇跡的に、ビザが降りることになった。

半年以上の別居生活を経て、ついに家族全員で、広州の地を踏むことができた。しかし、安堵も束の間、妊娠8ヶ月の妊婦、こども2人、猫1匹とともに、雨が降りしきる真夜中、隔離ホテル行きのバスに乗り込んだ。そして、3週間のホテル隔離が終わるとすぐ、妊婦検診に向かった。

産院は、夫がいくつか見学して、先に決めてくれていた。当時の私は、テレビ電話越しに、どこも意外に綺麗だ感じていた。産院での検診は、通訳さんが、終始サポートをしてくれた。これまで何人もの日本人や外国人の出産をみてきたと聞き、とても安心した。病室や医療

機器も、日本と同等か、それ以上の性能、清潔感があり、「中国での出産は怖い」というイメージは、初回の検診から払拭された。

中国と日本の妊婦検診で、大きく異なっていた点。それは、胎児の性別を事前に教えないことと、日本では任意である出生前診断が、中国ではほぼ必須だということ。出産に対するお国柄の違いを肌で感じた。

妊娠の経過は良好だったが、一つだけ懸念があった。私の場合、過去2回の出産とも帝王切開だったため、今回も帝王切開だと決まっていた。しかし中国は、いまでも一人っ子が多く、3回目の帝王切開の事例はほとんどないのだろう。出産のリスクがやや高いと言われ、追加料金を支払った。

この時期の広州のコロナの感染は、厳しい規制のため、かなり抑制されていた。PCR検査が陰性であれば、小さいこどもも含めて、病院の個室で一緒に過ごすことができた。一方、東京は、コロナがまたピークを更新したタイミングで、当時は、検診から出産まで、孤独に耐える他なかった。私は、東京よりもここで出産できることが、とても嬉しかった。

きたる出産当日、こどもたちは学校が休みだったため、一緒に病院へ。この時のこどもたちは、新しいインターの学校に通い始めたばかりで、まだ馴染めずにいた。「言葉が分からなくて、休み時間に遊ぶ人がいない」と切なく漏らす娘に、心を痛めた。彼らも新生活に強いス

トレスを感じていたが、新しい家族が増えることを心から喜んでくれていたことが、救いだった。

出産は、帝王切開なので、私は医師達に身を委ねるだけなのだが、やはり緊張する。特に、一切聞き取れない中国語が飛び交う中であれば、なおさらだ。しかし、手術室では、音楽が流れ、医師は鼻歌を歌い、看護師も談笑していた。少し気が抜けた。通訳さんが、手を強く握って、日本語で励ましてくれたことも、とても心強かった。

下半身の麻酔を入れて、手術が始まる。しかし、いくら麻酔を入れても、下半身の感覚は残ったままだった。これには、激しく焦った。ふと、目を閉じたら、急に意識がなくなった。そして、次の瞬間、赤ちゃんの泣き声で、目が覚めた。それが、本文冒頭の「キレイな女の子ですよ～」の台詞につながる。

産後の入院生活は、看護婦さんと翻訳アプリを使いながら、何とか過ごすことができた。入院中は余裕がなく、中国語を覚える気力はなかったが、唯一、「痛^{ドン}」だけ、頻発したため、自然と覚えてしまった。日本では、産後すぐに、院内の授乳部屋に集まり、精神的にも体力的にも辛い中で、スパルタな授乳指導を受けることも多い。

また、新生児の体重を測って、母乳やミルクの量を細かく管理する。しかし、ここでは看護師さんが個室にきて、終始、授乳を手伝ってくれた。私はほぼ寝ているだけで良かった。おおらかな育児が、私にはとても有り難かった。中国には、^{ヨハス}月子という風習があり、産後の赤ちゃんのお世話やごはんを用意してくれる場所がある。私は残念ながら経験することはなかったが、日本でもこのような産後ケア施設が増えたら、助かるお母さんがたくさんいるはずだ。

中国生まれの娘は、すくすく育ち、2歳になった。ちなみに、上のこどもたちは、中国広州のフランス学校に通い、フランス語、中国語、英語、日本語と、四カ国語の生活に染まっている。中国の文化だけではない、多文化が融合した国際的な広州の生活を、家族みんなで楽しんでいる。末娘とは、これから、何語で会話ができるのか、とても楽しみだ。

モワヌ前田未希（もわんぬまえだ みき）

1986年生まれ、東京出身。青山学院大学を卒業後、法人向け教育研修会社にて、グローバル研修等の営業や講師に従事。フランス人の夫に帯同し、中国広東省広州市へ渡航。現在は、YouTube「中国広州の街歩き*モワヌファミリー」を通して、中国のリアルな日常を発信中。趣味は、中国の古典舞踊を踊ること。

「私の中国物語」その④

四川オペラを見て平和を考える ～国際観光の可能性～

会社員 石山 竜丞

2024年2月、私は初めての中国旅行として、MBA（社会人大学院）の仲間と成都や重慶を訪れました。中国人留学生の友人がガイドとして案内をしてくれて、歴史的遺産や食文化を体験する貴重な機会となりました。歴史遺産のスケールの大きさや、食文化の豊かさ、そして経済発展著しい都市の風景などは期待通りの感動体験でした。その一方で、私の中国観を一変させる期待以上の体験がありました。それは、金曜日の夜、地元の人たちに交じって、おそらく海外からの観光客は私達だけであろうという状況で鑑賞した四川オペラでした。

四川オペラはシンプルながら多彩な演目で構成され、10分程度の短い出し物が次々と行われます。寸劇や手品、胡弓演奏、美しい舞、中国雑技団を想起させるサーカス

のようなパフォーマンスなど、喜怒哀楽が詰まった一時間です。そのエンターテインメント性と手頃な価格から、家族連れを中心に老若男女が観客席を埋め、笑いと言語で溢れています。

特に、心に残ったステージを幾つか挙げると、まず冒頭では三国志を表した演劇がありました。特に、劉備玄德や諸葛亮孔明が登場する場面では、地元の人々の誇らしげな表情や歴史的偉人に対する尊敬の念を感じたことがとても印象的でした。また、日本の吉本新喜劇のようなドタバタコメディもあり、話している言葉は全くわかりませんでしたが、怖い奥さんに旦那が怒られるというシーンは世界共通で面白いもので、中国人も日本人も関係なく一緒に大笑いできました。そして、ショーのメイ

イベントである変面では、次々と面が変わる素早い動きに、息もつかせぬほどの驚きの連続で、歓声が途絶えることがありませんでした。まさに、観客のボルテージは最高潮で、興奮の中にも神秘的な魅力が溢れ、心から感動するステージとなりました。

観劇直後、私はとても幸せな時間を過ごしたという深い満足感を感じました。それは、異国の地で異国人である自分が、現地の観客が一体となって感情や雰囲気を共有したということに、エンターテインメントの根源的な魅力を感じたからです。これは、スマートフォンやインターネットに娯楽を依存する今日の日本人が忘れてしまったものなのかもしれません。四川オペラを通じて、家族や友達が揃って笑い、驚き、感動するという場の魅力を思い出すことができました。日本の家庭がかつてテレビの前でプロ野球を観戦する姿を思い出し、温かみとノスタルジーを感じました。そして、何より、このような空間に身を置くことの楽しさは、中国人であっても日本人であっても変わらず、共通する価値観の存在を確かに感じることができました。

このように、四川オペラというとても魅力的なエンターテインメントを満喫しましたが、それだけではなく、観光の在り方を見つめ直す貴重なきっかけともなりました。それは、四川オペラを通じて中国の成都の人々の心の豊かさや文化を垣間見ることができたということです。友人が連れて行ってくれた武侯祠や都江堰などの観光名所も大変すばらしいものでした。しかし、これらはあくまで過去の偉大な功績を振り返るものであり、今の中国を感じるものではありません。それに対して四川オペラは現代の市井の人々の生活を感じることができる唯一の場であり、他にはない魅力がありました。そして、正直に言うと訪問前は中国という国に不安を抱えながら渡った私にとって、中国がグッと身近に感じた瞬間でもありました。この「身近に感じる」という体験こそが、国境や文化を越えた人間と人間の交流であり、インターネットでは成しえない真の相互理解に繋がるのではないのでしょうか。

私は、観光とは、単なる名所巡りではなく、地域の人々や文化と触れ合うことが重要だと実感しました。そして、観光での交流を通じた相互理解によって、平和への道が開けると信じます。国際連合が掲げる「観光は平和へのパスポート」のスローガンは、観光が国際平和の実現に貢献する可能性を示しています。近年の日中関係の緊張を鑑みても、このメッセージは特に重要なはずで、私は中国滞在中に多くの親切なおもてなしを受け、異なる文化や言語を持つ人々との交流を通じて、共通の価値観を見いだすことができました。このような経験が、国際観光が持つ潜在的な平和の力を示しています。中国は、近代的に都市化する整然とした街並みの中に、悠久の歴史を感じさせる文化と、それを大切に守り続ける人々の生活を見ることができる非常に魅力的な国でした。孔子の言葉である「有朋自遠方來、不亦樂乎」を胸に抱きつつ、日中をはじめとして、世界中の旅行者が地域の人々との交流を通じて、世界平和に貢献することを心から願っています。

石山 竜丞 (いしやま りゅうすけ)

1979年東京出身。立教大学観光学部を卒業後、鉄道会社にて沖縄県などのリゾート開発に携わっている。学生時代より旅行を趣味とし、アメリカやオーストラリア、インドネシア等をめぐる。2022年から立教大学大学院の社会人MBAコースに通学し、卒業記念旅行として指導教授・同級生と中国旅行で成都・重慶を訪問した。四川オペラのほかに思い出に残ったのは、重慶の火鍋と白酒で地元の方と交流したこと。



四川オペラの劇場前で、登場人物を模した銅像と記念撮影